

## 「弘法は筆を選ばず、編集者はワープロを選ばず」

ーテキスト形式でお願いー

千 歳 寿 一

いま、世のなかにはひどい不景気、政府も超赤字財政で、大変な時代になっています。皆様のお茶の水地理学会も、今年の総会でお知らせしたように、厳しい財政状況です。

支出のなかで一番大きいのは、なんとといっても機関誌「お茶の水地理」の印刷費です。半分まではいってませんが、かなりの経費を必要としています。だからといって、機関誌をあまり薄いチャチなものにするわけにはいきません。学会のシンボルでもあり、会員をつなぐ重要な情報チャンネルでもあるからです。とすれば、できるだけ充実した内容で、なんとか安く作り上げる方法を工夫しなければなりません。

幸いにも、それがあるのです。結論を先にいいますと、ワープロで原稿を書いて、それをそのまま版下にして、オフセット印刷にすると、写真製版代と印刷代だけですみ、大幅に費用が削減できるのです。つまり、地図を印刷するときのように、論文の原稿をそのまま写真にとって版を作り、それを印刷機にかけるという方法です。地図の印刷方法は地図学で教わっていると思います。学生時代を思い出して下さい。

実はこの方法は、すでに方々で使われています。よく見るのが、日本地理学会の予稿集です。最近では発表要旨集と名前が変わっています。中を見ると、いろいろな機種種のワープロで書かれていますから、ページ毎に字体や字の大きさが違ってきます。いくら安くできるといってもこれはどうかと思います。予稿集ならともかく、機関誌がこれでは情け無いという声が聞こえそうです。

そこで、一工夫が必要です。皆が同じ機種種のワープロを使えばいいのですが、それはど

う考えても現実的ではありません。そこでお願いなのです。皆様がワープロで原稿を打ってフロッピーに保存するとき、MS-DOSという形式で保存して頂きたいのです。MS-DOSに変換して保存すれば、そのフロッピーは他の機種種のワープロで読み書きができます。これは、別名テキスト形式文書と呼ばれています。つまり、テキスト形式文書のフロッピーで投稿して下されば、地理学教室のワープロから版下になる原稿を打ち出すことができるようになるのです。

それを行う方法ですが、例えばOASYSを使っている場合、「補助」という機能のなかに、「文書保存」というのがあって、そこでMS-DOSで保存する命令が選べるようになってきます。これを選ぶと英字と数字計8文字で文書名を記入するように要求されます。文書名というより、記号になってしまいますが、それを打って最後のTXTはそのままつけておきます。このとき実は、事前に別の文書フロッピーをMS-DOS用に作成しておかなければなりません。この準備は、「補助」という機能のなかで、フロッピーの作成の命令の選択をMS-DOS用として済ませておきます。OASYSでも少し前の機種種では、一度そのまま普通のフロッピーに保存して、そのフロッピーからMS-DOS用のフロッピーに移すようになっていますが、「補助」のなかで「MS-DOSフロッピー作成」で用意を整え、同じく「補助」で、「MS-DOSファイル交換」、「OASYS文書→MS-DOS」と選び、交換元フロッピーと交換先フロッピーの挿入、文書名記入の操作でできます。

最近では、パソコンに組込まれているワーブ

ロがよく使われています。一太郎とかワードとかいうワープロソフトです。パソコンのワープロからは、もっと簡単にテキスト形式文書にできます。保存するときに、「テキスト保存」を選択すればすむソフトでは、そのとおりすれば一件落着です。ウインドウズ95で動かししている機種では、ファイルの種類をさいてきますので、3角のボタンをクリックして、ボックスから「テキスト」を選び出して

保存します。パソコンの場合は、テキスト用のフロッピーを別に用意する必要がないので便利です。

ということで、どんなワープロでもパソコンワープロでもかまいません。テキスト形式のフロッピーでご投稿下さることだけをお願い致します。「弘法は筆を選ばず」という諺がありますが、編集者はワープロを選びません。

## 卒業50周年に想う

貝山 久子

1997年10月17日、母校創立にゆかりの深いお茶の水のガーデンパレスで、私共の卒業50周年同期会が11名の恩師をお迎えし、114名の同期生が集まってなごやかに且つ盛大に行われた。ここに云う私共とは、昭和22年3月25日に母校を巣立った東京女高師の文科・理科・家政科・体育科、東京女子臨時教員養成所(昭和16年から23年までの設置)の理科・家政科・体錬科、東京特設中等教員養成所(昭和15年から7年間戦争未亡人のために設置され、2年間の修学年限で女学校の教員となった)の裁縫科の卒業生・修了生のことで、総数263名であった。

当日はロビーで記念撮影の後パーティーの開幕となった。私の開会の辞に続き松本千代栄先生のご挨拶、勝部先生のご発声で乾杯の後、先生方のスピーチ、文科が中心となって各科から写真の提供をうけて編集したスライドは、私共を50年前の日々にタイムスリップさせてくれた。動員先の兵器工場での写真、寮の焼け跡に立つ友、戦後寒い教室を逃れて校庭の陽だまりで伺った講義、物故された先生方、戦後復活した第1回の徽音祭のスナップetc.どれも貴重な青春の一コマであった。

その後、体育科有志によるフラダンスが披露されてお開きとなり、クラス会へ移行したのである。

私が入学したのは戦局にかげりが見えはじめた昭和18年のことであったが、まともに勉強ができたのは1年間だけで、2年生の夏には動員令により各学年各学科それぞれに定められた場所で勤務に従事した。私共のクラスは板場師の造兵が動員先で、夜勤もあるかなり苛酷な労働であった。昭和20年5月25日の空襲で寮が焼失し、その後しばらく付属高女の教室で寝泊まりしたあと動員された群馬県の農村で終戦を迎えたのである。

授業が再開されたのは秋も深いころであったが、その時の期待と不安のいりまじった気持ちを今もまざまざと思い出す事が出来る。

私共の時から戦時中実施されていた半年間のくり上げ卒業が廃止されて3月卒業となった。文部省の指示に従って全国各地にちらばった同級生であったが、やがて年に一度のクラス会を持つようになり、1月15日に泊りがけで集まって語り明かすのが常であった。この語らいの中から戦時中の体験を風化させたくないという意見が出て、構想を練り卒業